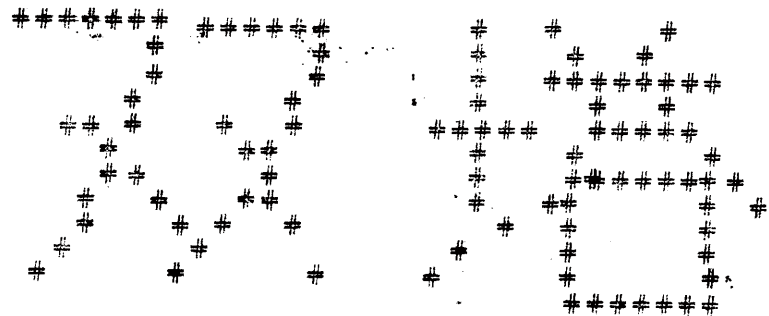


F. Mitsumori



1 9 6 2 , 7 月 号

三本杉 秀之

「双塔」才四十九号

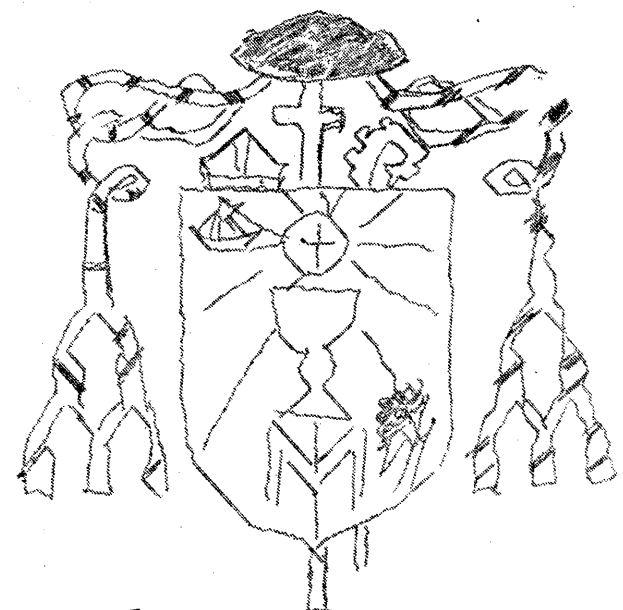
昭和三十七年七月八日発行
新潟司教認可
新潟カトリック教会青年会発行

目次

伊藤司教様の紋章の説明	一
冒頭の言葉	二
新司教様をお迎えして	三
六月の朝	五
叙階式の感想	六
はじめて司教様におあいして	七
六月の教会日誌	八
編集後記	九

「紋章」の説明

私は未信者の家庭に生れ、改宗した者ですから、
 宗教的なモットーを選びました。ルカ伝二章の「
 異邦人をてらす光」というのがそれです。この光
 はマリア様より生れましたので、紋章の下に「
 M」の字によつてそれを表わしました。この光
 はイエズス様であり、この世において神人とし
 て御聖櫃の中にあります。上の空色は日本海を
 表わし、船は「沖に漕ぎ出せ」（ルカ伝五章）
 という聖書の言葉を思い出させます。下の赤色
 の所はイエズス様より光と熱とを受けて実った
 田を思わせ、米産地である新潟教区の三つの県
 を表わし、稲はそれをシンボライズしています
 又実ると実る程頭を下げる謙遜をも意味します
 布帛は神を知らせるだけでなく、カトリック信
 仰の最後は、お聖体の秘跡にこもるイエズス。
 キリストまで導かれなければ本当でありませ
 んので、このような紋章を作りました。



伊藤司教様の紋章

LUMEN AD REVELATIONEM GENTIUM

伊藤司教様に今月は書いて頂くことにして御承諾も得たのでありますが、司教様は目下秋田県下の教会を巡回中で、今月号に間に合いませんので、来月号に改めて御執筆願うことに致します。先月号では、私は司教区昇格の意義について述べました。みなさんの大方はあの司教叙階式の盛儀を目の当りに御覧になられ、又初の司教壮遊ミサにもあずかり、感謝と喜びは今なお新なことでありまじやう。今ここに前回述べたことを繰返す限りはありませんが、今一度司教区昇格の意義を思い出して見たいと思います。本教区は未だ布教地の域を脱せず、誕生したばかりの赤子の状態であるが、司教区となり、新しい司教様を迎え、迎えることによつて、独立した本来のあるべき教会態勢ができたのである。だからわれわれはこの司教様の陣頭指揮のもとに、己が救済のためばかりでなく神の御国の建設拡張のために立ちあがらねばならないという意味のことを述べたのであります。私はこの度一層強くこのことを実感したのであります。まず才一に、今回の司教様のお伴をして秋田県下の教会を巡回して痛感したのであります。秋田県は福音会にその布教が托せられております。去る二十四日(日)司教様の御郷里である秋田市の教会で盛大な歓迎があり、聖霊学院の体育館で壮遊司教ミサがありました。秋田市の教会は今やつと本建築の工事が始つたとところであります。あとは聖子今の福祉事業、能代、毛馬内、小坂、大館、本荘の教会を見ました。しかしそれらの教会はやつと始つたばかりで、手始めとして幼稚園を経営しています。毛馬内と小坂は歴史は古いのですが、多くの神父様方の本当に計り知ることのできない大きな犠牲と努力にもかかわらず、あまり進展しておりません。如何に農・伝導が困難であるかを知りました。それでもたゆまず努力を続けておられる宣教師の神父様方の姿を見て強く心を打たれました。われわれ邦人司教こそ早く代つてやるのが責任ではないかと思ひました。はるばる外国から来ておられる神父様方にあのようなところで働かせ、御苦勞をかけるのは全く見るにしのびない感じが致します。才二のことは今回の参議院

選挙のことです。教会活動と政治活動とは賢明に区別されるべきであります。しかしそれは決してわれわれ信者が社会人として無関心であつてよいということではありません。紙面の都合もあつて長く述べる積りはありませんが、やはりここで一つ反省すべき現実問題が横たわつてゐるのではないでしようか。

以上の二つのことから、司教区となつた教区の司教信徒の自覚と奮起がなべにあるべきかは言を待たずともお分りのことと思ひます。いざ「沖に漕ぎ出せ」(ルカ五章)。一(注一これは伊藤司教様の紋章の青海原に浮ぶ小舟の意味するところであります。)

今回新潟教区が司教区となり去る十四日伊藤司教様が新潟教区始めての新司教様に叙階されましたことは、私共新潟教区信者としてこの上ない光榮であり喜びとするところであり、先日の叙階式当日教会から御配布をいただきました叙階式の解説書を見させていただき、その中で伊藤司教様の略歴を拝読させていただきましたが実に私共新潟教会ないしは新潟教区には得難い立派な司教様をいただき感謝致しておる次第であります。伊藤司教様は一九〇九年秋田市にお生れのことであり、大変失礼で御座居ますが今年満五十二才というお若い御年配で司教という重責を荷負われたことであり、如何に御徳量があり、学識があり、行政的手腕を御持ちになつていられたかを知ることが出来る訳であります。さらに驚くべきことは北海中学師範学校東京大神学校を御卒業になり司教に叙階され二、三の教会に御勤めになり、一九四八年に

は三十九才の若い御才です。既に横浜教区の福司教にたられ以後引続き北米ワシントンの大学に遊学され、た外は副司教として今日まで御就任されておられたことは伊藤司教様が何れの方面にも秀れた手腕人徳をお持ちになつておられたかが伺われ、たのもしく存じる次才であります。又、文筆も御達ちにたり且つ学識も御深い関係がカトリック新聞委員会委員、カトリック映書倫理委員会委員等もなさつておられたらしく、私共信者としてますます威敬する者であります。私共特に私のような無為無能の者には此後度々司教様にお今えしてのお話の場がないのではなからうかと心配致した次才であります。しかるに今回幸ことに幸にも従来新潟教区は何か御祝がある際、まわり当番にて信者代表をきめさせていたたいておるのであります。私が今回代表に選ばれ東映ホテルでのレセプションに出席させていたたいたのであります。私が先程申し上げました新司教様の御経歴を拜見して威敬しておつたと申し上げましたがそれは全くの杞憂であつたといふことを知つたのであります。というのは東映ホテルへ参りましてから私の右隣には新司教様のおやさしい御母様がおられ、私の左隣には御名前は忘れませんがフランス人の神父様がおいでになり、カトリックの中央出版社関係の編輯を取材されるためか東映ホテルのことや出席しております日本人の一人一人についてしきりに私に質問しておられました。又私の前の方伊藤司教様の御人柄が大変立派で絶対に心配する必要はないと断言しておられました。又私の前の方々は食卓をはさんで、横浜からわざわざ御出席になられた東京大学法学部教授の久保さんがおられ同じく横浜から来られたアメリカ駐在の朝海大使の奥様の御母様で当年とつて七十八才であるとのことでありましたが末だ若々しく品の良い方で六十才前後と思われた御婦人等がおられました。酒がほどよくよう程に雑談に花をさかせたのであります。その際私が小さい時に洗礼を受けたのであり深いカトリックの理論を知らないこと、且つ若い時は運動の選手をして勉強は全くおろそかであつたこと、

中年から今日の老年までは仕事仕立でカトリックの勉強をしなかつたこと従つて人間の完成するに必要なエレメントすなわち、知、情、意、の方面にかけておりますが空を仰いで星空をながめ天地創造の美しく且つ時計の機械より精巧の規範力のあること、人体が実にむだなく造られておることなどから真善美の本源があることだけは知つておる旨を述べ、キリスト様の復活は史実によつてたしかめられておるからキリスト様が、真善美の本源であると確信するもカトリックの理論や教理をさつぱり知らないからこの偉大の伊藤司教様と御話が出来たらうと真顔で話合つておりましたら大笑いとなり、横浜からこられた方々もともども新司教様は円満な人格者であり実に温みのある方であるから世間話でもなんでも喜んで御聴きになり、話されるから心配はしないですよと新司教様をほめちぎつておられました。如何に横浜教区の信者が信頼しておられたことを知りただただ頭の下る思いが致しました。聖書の中に汝等全世界を得るとも、その魂を失なばなんの益かあらん！といわれておるのでありますからこの世の政治家や知事等に対しては心から尊敬しておるかどうかは疑問であります。が靈魂の司牧者であるこの立派な司教様をいたたいたことは心から尊敬し一致協力して新潟教会発展のため御指導いたしたいと存じます。簡単ではあります。が御挨拶と致します。

朝の六月

六月の朝はみずみずしい一本のままのキヌウリをがりがりとかむ朝食のお茶その香りは濃く夏の思い出が一度におしよせてくるやうなそんなつかしさ。

兄と姉姉と、まごたちはけしを動かす。

平和なあの音で、テレビには体操音楽がすがすがしくきぎの音を

叙階式の感想

新潟教区が司教区になる恵み豊かなるその日は、先日の雨あがり早々と立働く信徒の群とあけはなされた聖堂にひびきまじり司祭の姿、ルルドのマリア像の前に立たずむ修道者の姿が見え、やがて始まる叙階式の喜びを待っている様であった。六時半頃よりボツボツ信徒が到着し始め、受付も活気がでてきた。遠く秋田、横浜の人達、初めて見た顔なのに同じ神の子という意識をこの日程強く感じた事はなかつた。八時半、聖堂の前は神父様、修道者の黒い姿でうずまり、いつもひろびろとしたこの広場が行き交うのにせまきを感じる程であつた。このような盛大さの中で行なわれんとしている新潟教区の一信徒である自分に深い喜びを味わうにいられたなかつた。九時五分前、今まで談笑していられた神父様方、信徒が聖堂に入り終ると、司祭館よりドミニコ・エンリッチ大使を先頭に伊藤被司教様、三森神父様が出てこられた。青年男女が両側に並んでお迎えする。さてぎつしりとつまつた祭壇の前に十三人からの侍者がかがいがいしく動く。聖歌隊の力強い合唱と清ら

かな大使の讃歌が繰り返えされながらここに今新潟教区最初の伊藤庄治郎司教様が誕生したのである。司教に依つて神の恩恵がそのまゝ信徒に分配される事、信徒の苦しみを共に苦しむ事を望んでいるのが司教である。一人の秀れた人物が出ることはなしに多くの神の子が生れる事こそ神の望み給う所である。救霊に対し各々が貧弱になれ、等べんたつさわやかな小林司教様のお説教を聞き、新たな感激を味わつた。そして司教という偉大な聖職を再認識し、この神のお恵みを中心から感謝して、より教区が発展する様祈らねばと思つた。司教様のもとに全信徒が結集する必要がある。強い責任感と絶対的な愛情で結ばれていくカトリックのつながりを今こそ全信徒が感ずべき時だと思つた。とどろりなく式が終り聖堂より出てこられた伊藤司教様の両の目がきらりと光り、かるく会しやくされた時、このすばらしい光量に思わず地べたにひざまずかざるを得ないふん囲気であつた。強い責任感と絶対的な愛情を胸に秘められた司教様への限りない信頼と従順こそ神の最もお望みになることだと思ふ。

はじめて司教様におあいして

ききれいなお花がたくさんさき、たのしい六月です。

ある日こいずみ先生のおべんきようの時、こんど新しいしきようさまがいちしやいます。しきようさまは、とてもおいのりのねつしんなお方ですとお勤えてくれました。そして十七日のごミサは、しきようさまのごミサですから、みんな休まずごミサにあずかりましょうといいました。十七日はよいお天気でおみどうも新しいしきようさまをおむかえするのでとてもうつくしく、しきようさまも、りつばなさいふくをきていました。わたしははじめてあんなきれいな、さいふくを見ました。六月はキリスト様のみこころにささげられた月ですと勤えてもらいました。ルルドのマリアさまも、うつくしいお花にかこまれました。みなで新しいしきようさまをよろこんでおむかえしました。わたくしたちも、こいずみ先生のおべんきようをいつしうけんめいしきしよう。ですからしきようさまも、わたくしたちが、よい子になりますよう、みまもりください。そして、わたくしたちの、おねがいをイエズス様におつたいしてください。

わたくしたちがおとなになつても、いつまでも、いつまでも、いつまでも、いてください。

六月の教会日誌

三森記

新司教の任命があつて、聖母月もあたふたと過ぎ去つて、六月、叙階式の日が急ピツチで舞いこんで来た感じである。あれもこれもと同時にしなればならない気ぜわしさである。でもみなさまの御協力で着々準備は進んだ。

◎六月一日(初金)記者は名古屋の松岡司教さまの叙階式に出席するために、朝八時四〇分の準急「小諸」で出発。百聞一見に如かずで叙階式の見学をかねてゆく。

◎六月三日(日)松岡司教様の叙階式、伊藤新司教様も御出席、いろいろ打ち合せを行う。夕刻横浜に向う。

六月四日(月)中央出版社で買物をして、午後の佐渡号で帰館。聖堂の壁の修理も終り、足場も取りのぞかれ、美しく明くなつた。

◎五日（火）一朝二組の結婚式があつた。一組は長崎の信者、他の一組は、カリリナ三宮さんの結婚。◎八日（土）一組の結婚式があつた。◎九日（土）雨。伊藤司教の母が「羽越」で秋田からおいでになりました。御年満七十才。いたつて御壮健である。午後三時十五分、急行「佐渡」号で伊藤司教がお着きになりました。駅頭には多くの司祭たちと代表、花園教会の信者有志がお出迎えした。駅長室で休憩の後、三時半過ぎ、新潟司教座にお着きになりました。聖堂前には大勢の土曜学校の生徒信者の方たちがお出迎えした。聖堂でお祈りの後、お出迎えの信者たちに簡単な御挨拶があり、司教館にお入りになりました。◎十日（日）聖霊ご降臨の大祝日。九時に壮厳ミサ。◎十一日（月）至聖所に司教座が取りつけられる。新潟木工製作所作製。一叙階式も目前に迫りてんやわんや。◎十四日（木）初代新潟司教ヨハネ伊藤庄治郎被司教様のはれの叙階式。昨日来の雨も朝になつてはれ上り、あつからず寒からず絶好の叙階式日和となる。定刻午前九時入堂、パチカン公使エンリッチ大司教

様の司式、荒井司教（横浜）長江司教様（浦和）の共祝のもとにとどろく叙階の盛儀を成した。テデウムの歌が聖堂にあふれた。儀式には東京の神学院の神学生が奉仕し、聖歌は当教会の聖歌隊に神学生の応援を得て立派に合唱された。なおこの盛儀には司式共祝司教の他三名の司教、教区内の司祭修道女を始め、各教会代表有志、全国特に横浜教区から百名近い司祭、多数の信者達が参列した。約三時間にとんだ式の後、来ひん、聖職者、各教会代表など、二百名の出席のもとに東映ホテルで祝賀会が開かれた。これには新潟県知事、新潟市長も出席され、それぞれ祝辞も述べられ、午後三時盛會裡に散会した。いろいろと心配したこの大行事も信者一同のご協力を得て、本当に立派に終ることが出来、心から感謝している。◎十七日、三位一体の祝日、九時から伊藤司教様の初め壮厳ミサが行われた。この歌ミサには亀田教会の少年合唱隊も歌ミサ曲を合唱した。歌ミサ後、聖堂前で記念撮影をし、引きつづき信者ホールで、花園、亀田教会と合同で司教様の歓迎会を行い、代表の挨拶、霊的花束、記念品（当教会か

らは腕時計一個）を贈呈した。余興には横浜山手教会の歌隊の七人の有志の合唱もあつた。子供達もお祝いの紅白のおもちをもらい、大喜び、正午過ぎ散会した。

◎二十三日（土）伊藤司教様にご郷里の秋田教会の歓迎会にご出席のため、朝八時二十分「日本海」号で出発。記者も同伴。秋田の歓迎会模様。二十三日午後一時半列車は秋田着、ホームは多数の司祭、修道女信者のお出迎えがあり、駅を出ると道の両側に幼稚園の子供、聖霊学園の生徒学生が並んで歓呼をあげての大歓迎であつた。翌二十四日（日）伊藤司教ヨハネの祝日、秋田教会は司教館、信者会館は新しく立派に出来上つてゐるが、聖堂はちょうど建築工が始つたところであつた。それで聖堂は目下かり聖堂で場所がせまく、聖霊学園の体育館にかり祭壇を設けて司教壮厳ミサを行つた。それには、秋田県下の各教会からも多数参列していた。この歌ミサには司教様のご家族、ご親せきの方々も列席された。ごミサ後、その場で歓迎会があつた。正午から産業会館で歓迎祝賀会があり、県知事、秋田市長を始め

百名の参加者があつた。その司教様は各修道会、各教会を巡回され、七月五日夜帰館された。記者は三十日夜一足先きに帰館した。

編集後記

つゆもまだあけぬこの頃であります。如何お過しですか？編集もいつものことながら投稿がなく発行日が近づくにつれて編集委員も大変苦労を致しております。どうぞふるつて投稿して下さい。なお「双塔」の印刷日は、毎月才一金曜日です。みなさまの御協力をお願い致します。